

「社会行動主義」と G. H. ミード・I

—G. H. ミード『行為の哲学』に向けて（その2）—

安 川 一

1. 序

ミードの思考の枠組みを「社会行動主義」と名付ける——通説ともいえるそのようなレイブリングが、思いの外、容易なことではない。

ギリンは批判する (Gillin 1975:30)。「ミードは、実証主義の、つまり行動主義の枠組みの中で思考しているために、人間を社会的活動の自律的源泉として説明しようとする企図を果たすことができない」。ミードは「社会学的帝国主義者」であり、その「社会学的決定論」の枠組みでは、人間を「歴史的行為者」として描くことも、疎外を可視化することもままならない。「I」に明確な理論的位置づけは与えられておらず、それゆえ、人間個体は内的対話のダイナミズムを奪い去られている。その結果、人間は「現状維持」に寄与する「社会過程の怪物」として描かれることになる。⁽¹⁾

ナタンソンは論じる (Natanson 1956 [1973] :2)。「ミードの著作をつぶさに読めば明らかになるように、その洞察の豊かさたるや、行動主義を最広義に捉えたとしてもそれさえはるかに凌駕している」。「社会行動主義」の名辞は、ミードを現象学的思潮の系譜に位置づけようとする趣旨のゆえ拒否される。社会性の形而上学と、動的な主観性と時間をめぐる哲学とに基礎づけられた、社会的経験と自己の理論にこそミードの思想の機軸がある。行動主義の道具立ては、このような視角の展開にとって常に障害であり続けた。⁽²⁾

「社会行動主義」のゆえにミードを批判するのか、それとも、ミードの思想を別様に理解するがゆえに「社会行動主義」を批判するのか。——いずれにせよ、「社会行動主義」の内実が問われるだろう。ミードの視角の「社会行動主義」的位相は否定しえないからである。そして、それはまた、社会学的ミード受容の枠組みを問うことにもなるのである。

「人間個体・対・全体社会」、もしくは「内発性・対・価値内面化」という問題枠組みにおいて、人間の主体性＝主観性を「本来」視する立場からの、ミードの「自我」論への過度の思い入れは（船津 1976:101-119；1983）、ミードの「行動主義」的論述の含意を隠蔽し続けてきたといえるかもしれない。「身振り会話」「有意味シンボル」といったミードの語法の含意が「自己」発達の論理と連結した「役割取得」の概念に流し込まれ、この概念が暗示する内的営み——想像力の発揮——のイメージは、容易に議論を個体の「意味」解釈過程論に転化することができる（cf. Hewitt 1979；Scheff 1967）。それとともに、社会的・客観的に構想された「自己」の論理が、実存的自我、あるいは理想的自我の論理に転じることもまた造作のないことである（cf. Weigart 1975；Ames 1973ab）。「自己」は、後にも触れるように、確かに一つの問題ではある。しかし、それでもミードは、「刺激」と「反応」、「作用」と「反作用」、そして「コントロール」といった用語を用いて語り続けている。ミード理論は、「自己—相互作用」過程を介した世界の「意味」的構成過程論として一種「現象学的」に継承されてきたのだが、我々が一貫した議論を進めるためには、むしろ、ミードは「自己に関する議論を刺激—反応分析と統合すべきであった」（Stewart 1981:112）と、「行動主義的」に論じるべきなのかもしれない。

60年代以降のミード再評価の思想的潮流の背後には、いわゆる「規範パラダイム」・対・「解釈パラダイム」（あるいは「決定論」・対・「非決定論」）といった理論枠組みの分類図式が常に姿を見せていたが、そのことはシンボリック相互行為論（S I）の「シカゴ学派（H. ブルーマー）」と「アイオワ学派（M. H. クリーン）」との対比にも明確に現れていた（Meltzer et al. 1975: 55-67；cf. Blumer 1969；Kuhn 1964）。

簡単に要約してみよう。——「シカゴ学派」は個性記述指向的であるとされた。行為は、自己相互作用の過程を通じて「構成」され、予見不能で非決定論的である。文化的規範、社会的位置、役割関係などは、行為の最も外的なフレームでありこそすれ、個々の「役割形成」的行為を規定するものではない。その方法論的スタンス——「共感的内観」法、参与観察法、さらには「感受化概念」——は「発見の論理」に貫徹されている。

対する「アイオワ学派」は法則定立指向的であり、社会学的決定論的であるとされた。自己は「自己概念」として構造的に把握され、その背後には一定の

準拠集団が想定される。態度のセットとして安定である「自己概念」からは、個々の行為が一定予見可能である（「役割演技」）。T S Tに明白な「検証の論理」に貫徹された方法論的スタンスからは、ミードの着想の「経験化＝操作化」が目指された。

確かに、ミード的伝統における「正統」という評価が与えられてきたのは、「シカゴ学派」、すなわちブルーマー版S Iであった。クーンは、「自己」を「自己概念」として構造的に把握・操作化してしまった結果、「自己」の過程的で一種「弁証法」的な性格を、そして社会のネゴシエイティブな性格を看過してしまった。その結果、「創発性と真の内発性との可能性を捨て去ってしまっている」（Meltzer et al. 1975:67）。これに対して、衝動的な「I」が表現する人間経験の「創始的で、自発的で、未組織の側面」を強調し、これを自己相互作用＝「意味」解釈過程として理論の内に取り込んでいこうとする「シカゴ学派」のパースペクティブこそ、「正統」だというのである。

けれども、もっぱら批判の対象となったのも、この「正統」視された「シカゴ学派」だった。構造的・歴史的視角の欠落と、合衆国社会の現状維持のイデオロギーへの偏向に対する批判（cf. Shaskolsky 1970 ; Lichtman 1970 ; Huber 1973 ; Meltzer et al. 1975）。そして、経験的データをめぐる方法論的批判、すなわち、主観主義的・「現象学的」アプローチに距離を置く立場からの、質的データの取り扱いにかかわる批判（cf. Kolb 1944 ; Kuhn 1964 ; Denzin 1969）。——とりわけ注意したいのは、これらの批判が、自らの立論の思想的基盤を同じくミードに求める研究者たちからも生じているということである。「主観主義的」（あるいは「現象学的」）で非構造的・非歴史的なアプローチは、ブルーマーその人の立場だと認識され、その理論的源泉だとされてきたミードの思想自体とは区別されるに到ったのである。そして、経験科学的指向性の強い研究者たちは、ミードの思考枠組みをあらためて「社会行動主義」とレイブリングし、自らの立場の思想的源流をそこに求めるとともに、ブルーマー版S Iと自分たちのそれとの間に一線を画そうようになったのである（cf. Stryker 1980 ; Baldwin 1981 ; 1985 ; Wood & Wardel 1983 ; Fallding 1982）。

かつて、構造機能主義に対する批判的潮流の一つとして、いわゆる「解釈パラダイム」の内に位置づけられたS Iである。その「伝統」にコミットする者

の目から見れば、最近のこのような論調は、なるほど「ユニークな社会学的貢献をなんら果たさないもの」のように映るかもしれない (Johnson 1983:277 ; cf. Johnson & Shifflett 1981)。だが、ブルーマー自らはもちろんのこと、他からもとりたてて大きな疑いをもたれず⁽³⁾きたブルーマー版 S I とミード思想との同一視——この同一視に対して、ブルーマー版 S I への内外からの批判を契機に、様々な疑問が投げ掛けられるに到ったということそれ自体が、立論の起点に据えられるべき一つの社会学説史的問題だということができる (安川 1984 ; 1985b)。問題は、ブルーマー版 S I が隠蔽してきたミードの思想の社会学的含意の開示に関わっている。そして、「社会行動主義」はその際の一つの核となる問題である。

一つの論潮として、近年、ミードの「社会行動主義」と現代の行動主義心理学とを比較する議論がある (Baldwin 1981 ; 1985 ; Woodward 1982)。例えば、ボールドウィン (Baldwin 1981) によれば、ミードの「社会行動主義」が示す強度の社会指向性、そして、現代の行動主義心理学の豊富な経験的データと精密な理論モデル——この二点を除けば、両者の枠組みは極めて類似しているという。両者はともに、「内的経験」に対するワトソンの形而上学的ラディカリズムを拒否し、活動として捉えた思考等の認知的事象の起源を社会環境に求め、さらに、心身二元論を拒否している。意味、意識、精神、自己をシンボリックな社会的相互作用から生起するものと見なし、言語、思考、文化、自己コントロール、等々の獲得に関する社会的環境の重要性を認識する。そして、人間性の進化論的・生物学的起源を強調し、生物学的因子と環境因子の相互交流の中に、行動に関するバランスのとれた生物-社会理論を提示しようとして⁽⁴⁾⁽⁵⁾いる。

心理学における「行動主義」の理論史や理論枠組みを論じる余裕はない。また、「行動主義」の社会学的含意を考察する余裕もない⁽⁶⁾。問題は「ミード」という文脈に限定される。いったい、ミードの「社会行動主義」はいかなるものとして理解されてきたのだろうか。「行動主義」の論脈で語られるミードの叙述の、ミード思想内部での意義と位置づけ、そして、その社会学的含意の問題である。「主体的」人間を社会的真空に想定する「行為=社会」論が観念論の範囲を越えて有効性をもたない以上は、そして、ミード自身の叙述が何よりも「社会過程」の論述へと集約されていく以上は (安川 1985b)、まさしくこの

「社会過程」を語る道具立てとして用意された「社会行動主義」を、我々は論じないわけにはいかないのである。⁽⁷⁾

2. 「社会行動主義」と「行動主義」

まずは「社会行動主義」のフレームを概観しよう。⁽⁸⁾

先に一例を見たように、通常それはワトソニズムとの対比において理解されてきた。そして、ワトソニズムへの批判的接近を介して形成されてきた視角だと言われてきた。

ミードの初期の研究は生理学的心理学、とりわけヴントのそれを指向するものであった。⁽⁹⁾ やがて、少なくとも1900年頃までには、デューイと「有機的行為」のフレームを共有するにいたったミードは、⁽¹⁰⁾ 「機能主義」心理学の流れに自らを位置づけるようになる(安川 1986)。そして、社会的状況への視角を含む20年代の成熟した社会心理学的思考において、ミードの視角は「(社会) 行動主義」的なものに転化したと言われる。確かにミード自身、「心理学は、順に連合主義的、運動說的、機能主義的、そして最後に行動主義的になった」(MS 21)と語ったのだった。このあたりの事情を、レック(Reck 1964:xxiv-xxv)は、「ミードは、排他的な生理学的心理学を、やがては機能主義心理学を離れて、社会行動主義として知られる立場に到達した」と語る。また、ミラー(Miller 1973:xxix)は、後年のミードを論じて、次のように記している。

「ミードはもはや自分の理論を『機能主義』と名付けることをしなかった。自分の理論が行動主義的な理論であること、とりわけ、社会行動主義であることを主張したのである。というのも、初期の機能主義心理学が、行動の社会的性格も、また精神や内省的思考の行動としての性格も、十分に強調するものでなかったからである」

けれども、いったいこのような「変化」は実質的なものだったのだろうか。⁽¹¹⁾ 確かに、次のような「機能主義」心理学批判の言明を見て取ることはできる。

「機能主義心理学は、意識過程がもつ、あるいは意識と名付けられるものそれ自体がもつ目的的性格を、適応という進化論的概念に同化することを企ててきた。しかし、機能主義心理学は、自然哲学に要求されているような、人間個体の意識を大きな過程の特殊な表現と見なすという課題を果たすことができず、概して意識は、これを説明するために進化を新しく定式

化することさえ必要とするような、新しく特異な因子になってしまっている。つまりそれは、古い進化にとって代わる新しい進化を含んでいるのである」(Mead 1910a:105)

批判は以下のような論点に関わっている。——二元論的世界観のもとに、結局のところ、意識は「内観」の領域に封じ込められ、実体視された原子論的世界にパラレスティックに対応させられるものとなる。内観によって到達された自己は、意識状態の結合体にすぎないもの、さらには、「あいまいで、重要でないように思われるある種の器官感覚を核に、その周囲に組織されるもの」(*ibid.*:107) となってしまう。そして、「他者」はこの内観の領域への投射物にされてしまう。——「自己は各々が一つの島であり、それぞれに自分自身の島にのみ確信をもっている。彼の知るところは、この比喻の海の上空にどんな蜃気楼が生じるかということにすぎない」(*ibid.*)。

だが、ミードが何を念頭に置いて「機能主義」心理学を批判したのかは定かではない。⁽¹²⁾このような論点は、ミードが「構成主義」心理学を批判する時のそれであり(1909:95-97)、何よりそれは、論文「心的なものの定義」(1903)で展開されたヴント批判の要点だったからである。すなわち、二元論的、構成主義的心理学を克服しようとして提起されたヴントの「主意主義」心理学(あるいは「統覚」の概念)は、結局のところ要素主義的発想と新たな二元論に陥っているというのが、ミードの主張であった(安川 1986)。してみると、むしろここで確認されるのは、かつての「機能主義」心理学の「有機的行為」フレームなのではなかろうか。事実、同じ論文には次のような言明を見ることができる。

「主観的な自己意識は経験の内に姿を現すものでなければならない。この経験の発達に何らかの機能を果たすものでなければならない。そして、この機能という観点から研究されるものでなければならない。その内に自己意識が生じるものだとしたり、それをもとに、比喻の橋や自己投影を通して我々の棲む客観的な社会的世界を構成していくところのものだとしたりしてはならないのだ」(Mead 1910a:112 ; 傍点は引用者)

「機能性」という観点から経験に接近しようとする彼の初期の着想は捨て去られてはいない。そこに「社会的世界」への議論展開を見て取り、もって「個体行為フレーム」の拡張を指摘することはできるにしても、それは「有機的行

為」フレームからの離脱を意味してはいないのである (Cook 1977 ; 1972 ; 1974)。では、いかなる意味においてミードは「行動主義」を自認したのだろうか。

ミードの言葉を引いてみよう。

「我々が採用する行動主義の立場とは、ワトソンのそれよりもずっと適切なものだ。ここで言う広い意味での行動主義とは、個体の経験を、彼の行為という観点から、それもとりわけ（もっぱらそれだけというわけではないにしろ）他者から観察可能な行為という観点から、研究していかうとするアプローチのことを言っているのである」(MS 2)

ミードが、ワトソンのごとく心理学の「客観化・実証科学化」、すなわち心理学の「自然科学化」を主張しているわけではもちろんない (cf. Watson 1930 [訳1980])。「行動主義」という同一の語を用いこそすれ、一定の体系だった理論や方法の一致を両者の間に確認することはできない。デューイの批判が決して方法的批判ではなく「概念的」なものであったことを想起してみよう (Dewey 1896 ; cf. Cook 1977:309)。批判されていたのは、心理学的手法の妥当性ではなく、二元論的世界観に裏打ちされた心理学的概念構成だったのである。そして、ミードの「行動主義」の主張も同一線上の議論に捉えることができるだろう。

例えば、論文「自己と起源と社会コントロール」(1925)では、「前行動主義心理学」が、そのデカルト以来の二元論的世界観——「自然の分岐 (bifurcation of nature)」(1925:269 ; cf. 1927:107f) ——と、「唯我論」的接近法——「内観」法——のゆえに批判される⁽¹³⁾。対する「行動主義」心理学は、心的状態ではなく外的行為を研究素材とし、「過程としての行為」をとりあげる点を評価される。「前行動主義」心理学の「唯我論」的世界を退け、他の経験科学が扱うのと同じ「客観的世界」に対象領域を据えることが強調されるのである (1925:267-268)。それは、心理学的对象に関する概念的批判であり、ミードが「行動主義」を評価するのは、「内観」法をとらないというその一点なのである (1927:106)。——「内観に対する行動主義者の反対は正当である。内観は、心理学的研究の見地からすれば実りある企てではない」(MS 105)。

けれども、ミードにとって、「内観」説の否定はワトソニズムを帰結するものではない。「内観」説を退け、外的に観察可能な「行為そのもの」に立ち戻

り、「有機体を活動的なものとして考察する」(MT 404)ことは、ワトソンのように「意識」や「内的」経験を心理学の射程から(あるいは「存在論」的に)消し去ることを意味するわけではないのである。彼が、「行動主義心理学は行為を神経孤ではなく、一つの全体として扱ってきた」(1925:270)と論じていることに注目したい。彼の言う「行為」は二元論的世界観に立って機械論的にイメージされる「動き」ではたい。ミードは、「有機的行為」のフレイムに従って、行為を一つの全体的な「過程」としてとりあげ、心理学の対象領域を、分岐した自然のいずれに還元することもなく、当該の(社会的)過程における「機能性」に見出そうとする。目指されるは、諸経験の「行動主義的」還元ではなく、「行動主義的」説明であったのだ(MS 10-11)。こうすることによって、自然の本質は何かといった、認識論的な、あるいは形而上学的な問題の回避が企図されたのである(1925:269-270)。ミードの「行動主義」とは、その意味で、二元論的認識論回避の、あるいは非二元論のフレイムだったのだ⁽¹⁴⁾。

二元論を離れ、個体と環境の適応関係に見出される「機能性」として「行為」をとりあげ、そのことを通じて「内的」経験を「説明」せよという主張が、ミードのいう「行動主義」であった。そして、その限りにおいて、この視角は初期の「機能主義」心理学の枠内におさまるものであったということができる。事実、ミードは行動主義の二系列を指摘し、それぞれをワトソンとデューイに代表させているが、この場合の「行動主義」とは、精神を「内観」によって把握される意識状態からではなく、個体の行為という観点からアプローチする視角を意味する名辞であった(MT 387-395)。両系列を分けるのが「意識」の扱いであった。両者は、共に「意識」を何らかの心的実体、あるいは心的要素として考察することについては批判的であったが、一方のワトソンがその心理学的存在を否定したのに対して、もう一方のデューイは行為における「機能」という観点からこれを扱う。ミードはこのデューイ的系譜に立ちながら、「行為に関する叙述を、ワトソンがしたよりもずっと貫徹したものになければならない」と論じるのである(MS 11)。

「社会心理学は、科学的に研究、分析されうる、観察可能な活動から、すなわち、動的な進行中の社会過程とそれを構成する社会的行為から出発するという意味で、行動主義的である。しかし、それは個体の内的経験、すなわち、社会過程の、あるいは社会的活動の内的位相を無視し去るという

意味で行動主義的なのではない。逆に、社会心理学は、ある全体としての過程におけるそのような個体経験の生起にこそとりわけ関心を払っているのである。内部から外部へという代わりに、外部から内部へと探究するのである……。……我々のアプローチは行動主義的である。けれどもそれは、ワトソン流の行動主義とは異なって、外からの観察では及ばない行為の部分をも認めるものであり、ありのままの社会状況における人間個体の行為を強調するものである」(MS 7-8; 傍点は引用者)

そして、この「有機的行為」フレームの非二元論的視角が「個体・対・社会」という二元論の問題へと拡大された時、これが「社会行動主義」と呼ばれるのである。

3. 「社会行動主義」とシンボリック相互行為論

当初の問題に戻るとしよう。この「外から内へ」という「行動主義」的な視角は、そして、社会的状況での「機能性」に焦点を据える、その意味での「社会行動主義」の視角は、社会学的見地にいかなる示唆をもたらすのだろうか。

少なくとも一つ断言できることは、ミード的視角の最良の社会学的表現を、ブルーマー版 S I に見出すことはできないということである。すなわち、それは、自己をもった個体の存在を前提とする、「意味」構成過程としての「行為-社会」論ではないということである。

ブルーマーは、ミードが「説明」しようとしていたまさにそのものを立論の起点に据えていた。「自己」をもち、「意味」を操作する能力をもつ個体が、社会的真空において前提として想定されていたのだった。これをもって、ブルーマーはミードが理論的に基礎づけた「内的」経験を前提に新たな議論展開を行った、そのように言えないわけではない。しかし、両者の指向性の差異はあらためて確認されるべきである。このことが、ブルーマーによるミード思想の社会学的展開に重大な偏差をもたらしているからである。

様々な論者たちの議論を手掛りにしてみよう。

例えば、ブルーマーが自らの立論基盤をミードに求めることを公言した論文に対してなされたベイルズの論評によれば (Bales 1966 ; cf. Blumer 1966ab), ブルーマーは不必要な二律背反的設問——例えば、自己は「構造」か「過程」か、行為は「内外の因子の中性的媒体」か「形成過程」か、あるいは、対象は

「固有の实在物」か「意味構成体」か——をたててその一方を過度に強調しすぎている。そして、人間には「自己」があるということを議論の出発点に据えるブルーマーの論法は「哲学的観念論者」のそれであり、意味や価値の問題への解答を社会的相互行為という文脈から導き出そうとしたミードの「プラグマティズム」、そして「社会行動主義」とは異なるものであるという。「私の印象によれば、ミードの社会行動主義は、ミードにとって意味論の監獄を脱する鍵となるものであった。そして、思うに、ブルーマーはまさにこの監獄に囚われているのである」(Bales 1967:546)。

ブルーマーの論文はまた、同じくS Iの陣営に属するストーンとファーバーマンからも批判されることになる(Stone & Farberman 1967 ; cf. Woelfel 1967 ; Blumer 1967)。彼らによれば、ブルーマーは、ミードが不変性や構造を普遍的シンボリズムに基礎づけているということを看過している。ブルーマーの方法論的主張はクーリーの「共感的内省」をほうふつさせる「主観的名目論」であり、思えば、まさしくこの点にこそ、ミードのクーリー批判の趣旨はある(Mead 1930)。

ブルーマーの視角を「社会的相互行為の名目論的理論」と呼んだ一人に、J. D. ルイスがいる(Lewis 1976:356)。彼はプラグマティズムの伝統をジェームズ・デュースの「名目論的」伝統とパーサーミードの「实在論的」伝統に区分したうえで、ミードの立論に意味コンテクストの社会的实在が前提とされていることを指摘する。それは、意味の社会的コンテクスト、社会的諸関係の存在を自明なものとして想定し、この点で現象学的思想の伝統とは異なっている。⁽¹⁵⁾すなわち、意味は行為に先行して社会的に所与のものとされており、従って、その解釈・創生が問題なのではない。問題は「行為者の社会的位置について一貫したイメージを形作るよう諸々の意味を秩序づける」ことにあり(*ibid.*:349)、ミードの「社会行動主義」とはこのような問題にそった方法論的要請であった。

マックフェイルとレックスロートの議論は、このような論点をいっそう包括的に展開している(McPhail & Rexroat 1979 ; 1980 ; Blumer 1980 ; cf. McPhail 1979)。彼等のミード理解の要点は、ミードが一定の方法論的視角を展開していたということ、すなわち、「体系的観察と実験的研究」を強調し、その点で「実証主義的」科学観の延長に自らの「方法論」を提示していたということである。そして、この方法論的視角が、ブルーマーの「自然主義的」方

法——「踏査 (exploration)」と「点検 (inspection)」の二段階の研究過程——
との対比の上に描かれるのである。⁽¹⁷⁾

「ミードは仮説を研究課題の経験的解決の起点に置いているが、これに対してブルーマーは、諸々の分析的構成要素間の関係の発見をもって経験的解決の終点としているように思われる。仮説に関するミードの扱いが、たとえ形式的には演繹的でないとしても理論的に基礎づけられているのに対して、ブルーマーの扱いは事実上非論理的で帰納的な経験主義である」
(McPhail & Rexroat 1979 :453)⁽¹⁸⁾

マックフェイルらは、ミードの「社会行動主義」を、プラグマティズムが「観念論—実在論」のギャップを超えるための手段であると性格づけた (*ibid.*: 457)。そこでは次のような想定がなされている。——「リアリティは予めそこにあるものとされるが、観察された出来事を反応の収斂 (convergent responses) に基づいて——すなわち、科学にとっての客観的データと人間行為の他領域における共有された意味とを確立する反応の収斂に基づいて——秩序づけるのは科学である」 (*ibid.*:459)。

マックフェイルらは、次のようなミードの言明を引いて、ミードが科学的方法を日常生活における知性的な問題解決過程の延長上に位置づけていることに言及している。

「この方法の科学性は、厳密さに細心の注意を払いながら、問題を明確化し、データを集め、仮説を構成し、実験を行うことにある。しかもこれらは、絶えず起こる困難に対処するために日常に行っている単純な推論過程を精緻化したものに他ならない」 (PA 83)

そして、このような科学的な営みは、「事物の性質は何であるかなどという形而上学的ドグマ」には関与せず、「観察された出来事の秩序づけ」に向かっている (MT 275)。「意味」は相互行為場面に「反応」として与えられ、「解釈」とは唯我論的営みであるというよりは「外的で顕在的で物理的、もしくは生理学的な過程」である (McPhail & Rexroat 1979:456)。そして、「共有された意味」、もしくは「意味の共有」とは反応の「収斂」である (*ibid.*:457-458)。ここでマックフェイルらが注目するのは、ミードにおける「パースペクティブの社会的・行動的扱い」である。すなわち、パースペクティブの客観的実在とは、外的反応の収斂を通じて確認される、諸個体それぞれのパースペ

クティヴの「一致」だというのである。従って、人間行為の、それも「内的」経験に主たる関心を払っているように見えるミードであっても、彼にはブルーマーの（そしてクーリーの⁽¹⁹⁾）論じるような「特異な方法論」は必要とされない（*ibid.*:456）。つまり、ミードの「社会行動主義」とは、社会的状況に進行する外的な出来事（反応の「収斂」）をめぐるコントロールされた観察を通じて、出来事が秩序づけられていく方向を探ろうとする「方法論的」営みであるといえることができるのである（*ibid.*:459）。

ここでとりわけ重要だと思われるのは、マックフェイルらがミードから取り出した「科学とは社会的行動である」（*ibid.*:454）という認識である。すなわち、科学的方法は日常的問題解決過程に基礎づけられたが、それはまた、社会的状況における社会的営みでもあった。一つ一つの出来事のユニークさに言及しつつも、ミードは「科学にとっては、これら例外的経験は、組織化された普遍的な論理的構造をもつ世界の内部で生じる」と論じ、マックフェイルらも引いているように、「個別的経験は組織化された構造を前提としている」という立場に立っている（Mead 1917:203）。そして、このような世界の内部で問題解決が行われる以上、その「客観的な」解決の試み——仮説の形成——は、同一の（社会的）世界内に棲む他者たちの同意がなされるようにして行われなければならない（McPhail & Rexroat 1979:452, 454, 455, 458）。ミードは次のように論じている。

「破綻してしまった法則に代えて別の法則を打ち立てようとしているものとする。新しい法則が仮説として暫定的に提示される。それを検証する。検証が果たされればそれは作業仮説となる。そして、もしも他の人々がそれを検証し、これを果たしたならば、それは理論として是認されたものとなる。けれども、それがいかに理論として是認されたものであるとしても、なおまた別の例外にみまわれるかもしれない。すなわち、それはまだなお仮説的なのである」（MT 285）

このように、科学的な普遍世界は社会的な仮説再構成過程として変遷を続ける。問題の顕在化とともに、絶えず、既存の構造化された世界の仮説性が確認し^レかえされ、この世界は再構成＝再構造化の社会的営みに委ねられていく。マックフェイルらの理解は、そのようなミードの基本的想定を明らかにしている。ミードの「行為」観と「科学的方法」論とを結び付けることで、ミードの「社

会行動主義」をあらためて社会的文脈に位置づけ直し、それを社会過程への視角として再定式化している⁽²⁰⁾のである。

ブルーマーが批判されるのは、一つに、その行為者内在的視角の可能性の問題であった。行為者の見地に入り込めという要請の唯我論的危険性の問題である。またそれは、社会的なもの、さらには普遍的なもの概念化に関わる問題であった。ルイスやマックフェイルらの議論は、これらが、社会過程において絶えず確認し返されるべき性質のものであることをあらためて明らかにしたのである。そして、それはまた「行為」の概念化に関わる問題でもあった。独立個体を前提とする「行為」観から、社会的状況を焦点とする「行為」観へ——ブルーマー批判は、視角の指向性転換を要求する。

そして、これらの問題は、そのままミードの「社会行動主義」考察の論点でもある。第一に、「意味」はどのように概念化されているか。第二に、「普遍的なもの」、あるいは「客観的に所与なるもの」は、この枠組みにおいてどのような論理的位置づけをなされているのか。第三に、「社会行動主義」を含む「科学的営為」は、どのようなものとして構想されているか。自他関係を含む社会的状況へと拡張された「有機的行為」のフレームにおいて、ミードはこれらの論点をどのように定式化していったのだろうか。そして、そのことが逆に、「有機的行為」のフレームにどのような内容を加えることになるのだろうか。これらの論点を一つ一つ追いながら、先の問題に回答を試みることにしよう。

4. ミードの「意味」の理論

ミードの「社会行動主義」の視角は、ヨアス (Joas 1980 [1985]:91) も言及しているとおり、動物の表出的行動に関するダーウィンの分析、さらには言語と身振りをめぐるヴントの言説に負うところが大きい⁽²¹⁾が、ミード自身が語っているように (Mead 1909:94-97)、立論の直接的契機となったのは、マクドゥーガルの社会的本能論、ロイスによる内省活動の社会的基盤に関する議論、さらに、ポールドウィンの自己の社会的発生論であった。これらに対する批判的検討から独自の視角が提示されるに到るわけであるが、そこでの基本的な主張は二つに要約することができる。既に述べた「内観」的方法の拒否、そして、社会的状況の実在性と社会的対象(他者)の所与性の前提である。

「内観」に対する明確な否定が表明されるのは、1903年の論文「心的なもの

の定義」よりも後のことであった。別稿で論じたように、この論文では、心理学的対象の「機能」的把握が主張されながら、そこにはまだ唯我論の残映を見て取ることができた。すなわち、「個体としての個体」を、いわゆる「I」を、認知的再構成過程における「機能性」として概念的に提示しておきながら、それがまた、「内観」の領域において直接経験可能であるとされていたのである(安川 1986)。しかし、1905年に書かれたドラジセスコへの書評論文に到っては、自己に対する「内観」法的アプローチを否定し、自己を他者との関係において捉えるべきことが明確に主張されるようになる。ドラジセスコの、非内省的行動=機械論的世界・対・内省的(社会的)意識=目的論的世界、という二元論的世界観に対して、ミードは、「社会的知覚には物理的知覚と違う固有の認知的価値があるということに、直接的証拠は認められない」(Mead 1905:404)と主張する。そして、自己を「内観」の対象とすることが明確に否定されるのである。

「我々の内省が開示する自己はいわゆる経験的自己であり、それは、物的対象と同様に一つの構成物である。構成している自己 (constructing self) が内省の対象として現れることはない。この自己はカントの超越論的自我と同様に解剖台には乗らないのである。他者を構成することなくして経験的自己を構成することができないというのは事実である。他の物的対象を構成することなくして自分の肉体を対象として構成することができないというのも等しく真実である。物的対象よりも経験的自己にリアリティを与え、物的対象の意識を経験的自己の意識に結び付けるのはバークレー流観念論の仕業である。内省的意識の分析である心理学が、そのような性質をもちながらも基本的に社会的であるなどは、とうてい言い難いことである」(1905:404)

「外的・客観的」に進行する出来事、とりわけ、他者たちと共に関与する社会的状況、あるいは社会過程を、ア・プリオリな事実として議論の起点に据えることが、明確に主張されるに到った。精神、意識、意味といった「内的」経験は、こうしたア・プリオリな世界に「機能」的に顕在化するものとして評されることになる。そして、これらの「内的」経験は、すべて「社会性」において把握されるべきものと主張される。問題は、この「社会性」を保証するものである。

「行為 (act)」が「存在の基本単位」であるとされていたことを思い起こしてみよう。静態的な諸要素の機械的結合からなるのではなく、様々な位相を顕在化させながら絶えず変転を続ける「人間における存在の基本単位」であるという「行為」である (PA 66)。

「個体と環境の関係を規定する行為とは、本質的に、環境に対する基本的な適応である。行為とは、刺激と反応、そして反応の結果からなる、進行中の出来事である。それらの背後には個体の態度や衝動があって、これらが個体の感受性を特定の刺激に向け、適切に反応させるものとなっている」 (PA 364)

それは、「刺激」—「反応」という語によって語られる、しかし、絶えざる「問題状況」の出現を起点に顕在化する「適応」過程としての、すなわち、既存の構造化された有機体—環境関係の破綻を契機に起こる、修復への一連の活動としての行為であった。その限りで、状況限定的であり、問題解決指向的な行為であった。「新奇」で「創発的」なものを常に含みつつ、なおかつ特定の結果に向かい、意図的で目的的な行為 (cf. 1927:108) —いわばそれは、「問題」を契機にしてシンコペイトされる進行中の出来事の流れであった (安川 1985a)。そして、社会的行為、あるいは社会過程とは、様々な「行為」を含む、動的全体としての「状況」であった。ミードは語っている。

「刺激と反応を組み合わせせてみても社会的行為を説明することはできない。それは、ある動的な全体としてとえあげられなければならない。すなわち、そのどの部分をとってみても、それ自体では考察も理解もされえない、進行中の何物か—そこに含まれる個々の刺激と反応によって含意される複雑な有機的過程としてとりあげられなければならない」 (MS 7)

では、このような「動的全体」を「社会的」なものとして進行させるメカニズムとは何か。すなわち、「意識」を説明概念として導入することなく、このような「社会的」な「過程」の進行を、いかにして「説明」するかという問題である。ミードは語る。

「それは身振りのメカニズムである。身振りは、社会過程に関与する様々な個体有機体が互いの行動に適切に反応しあうことを可能にする。いかなる社会的行為においても、適応は身振りによって、すなわち、有機体の動作に関与する別の有機体の動作によって営まれる。身振りとは、この最初

の有機体から（社会的に）適切な反応を呼び起こす特殊な刺激として作用する、第二の別の有機体の動きのことである」（MS 13-14n）

「社会性」は、まず第一に「身振り」の相互適応——「身振り会話」——として語られる——このことの含意をさらに検討してみよう。そして、ここでは特に1910年前後の諸著作に注目し、ミードの思考の展開にそって議論を進めることにしよう。

論文「生理学的心理学の対照物としての社会心理学」（1909）では、社会心理学が心理学の単なる応用領域ではなく、生理学的心理学や他の社会科学に基礎づけられながらもこれらから独立の学問分野であることが論じられている。そして、これに関連して三つの論点が提示される。すなわち、第一に、社会性は「社会的本能」に基礎づけられている。第二に、「意味の意識」は社会的相互行為を通じて発生する。第三に、「自己」は社会意識の内に存在し、ここには、「他者」もまた直接に所与のものとして存在している（1909:97）。

ミードが必ずしも「本能論」を否定してはいなかったことは確認されるべきことである。「同一種⁽²²⁾の別の個体を刺激とする明確な行為傾向」（*ibid.*:98）として導入された「社会的本能」の概念は、一方で彼の社会心理学説から唯我論の残骸を払拭し、他方でまた、社会性と社会的対象の存在を「意識」という用語なしに語ることを可能にした。社会的本能は、有機体の注意を特定の刺激、それも他の諸個体の行為へと向かわせしめ、このような刺激に対する特定の反応傾向、すなわち「態度」を、個体の中に呼び起こす。そして、このような諸個体を特定の「社会的」関係形態へと駆り立てる一定の刺激となるものを、ミードは「社会的対象」と呼んだのだった。「社会的本能」は社会的対象の内容と形式を規定していることになるのである（*ibid.*）。

「社会的本能」の導入は、また、ロイスらの「模倣説」を、すなわち、社会性や社会意識の前提に「模倣」を置く着想を否定するものとなった。ロイスの議論は個体行為と個別的「観念」を前提に、「模倣」を媒介として「社会性」を説明しようとする議論であるが、ミードにしてみれば、最初に置かれるべきは社会的本能によって進行する「協働過程」であった。「様々な行為が行われてはいるが、それでもある個体の行為が別の個体の行為と応答しあっている」、そのような社会的状況を立論の起点に据えるべきだと主張である。

「行為あるいは行動が本能によって社会的に組織化されるということの重

要性は、社会集団内で、ある個体が別の個体のすることを、ということにあるのではない。ある個体の行為が別の個体の刺激となってある種の行為を呼び起こし、さらにまたこの行為が、最初の個体の刺激となってある種の反作用を呼び起こす——このようにして絶えざる相互作用が進行するという、その点にあるのだ」(ibid.)

社会的本能の導入、さらにはそこから導出される「模倣」説の否定からは、社会心理学の領域を、「社会的な刺激と反応の理論、そしてこれらの刺激や反応が造り出す社会的状況の理論」(ibid.)として展開すべきことが提起されるに到る。そしてこのことは、「意味の意識」論に結実していった。ヴントの「身振り」の概念を借りて語られる「意味」の理論は、この意味で「社会的状況」の理論としての性格をもっていたことができる。

「社会的相互行為という原初的狀況がなかったならば、身体身振りや音声身振りはけっして有意義性を獲得することはなかつただろう。神経興奮の流出にすぎない表情を意味に変えるのは、他の諸個体に対するこれらの身振りの関係である。そしてこの意味とは、当該行為がもつ、他の個体にとっての価値であった」(ibid.:102)

ミードの論脈において、「意味」は、「身振り会話」として展開する社会過程に、諸個体の行為の「関係」として与えられる⁽²³⁾。「身振り」は、完遂されていない社会的行為を予示的に内包するという意味で、「切り詰められた行為(truncated act)」であるが(ibid.)、「意味」は、そこに含まれる諸行為の「社会的関係」を表出するものとして、そこに「客観的に」導入されるのである。そして、「諸個体によって演じられる様々な役割(part)——すなわち様々な身振り——に反映された行為の共通内容」の中に、ミードは「シンボルの誕生と思考の可能性」を見て取ろうとするのである(ibid.)。

論文「心理学はいかなる社会的対象を前提とすべきか」(1910a)、そして、論文「社会意識と意味の意識」(1910b)では、このような「意味」観がいろいろ展開されている。

「身振り」はあらためて「行為の端緒」として規定され(1910b:124)、「身振り会話」は、多様に展開される行為の相互的適応の過程として特徴づけられることになる。ダーウィンが、さらにはヴントが批判される。すなわち、感情を表現するものとしての「身振り」、あるいは感情に対応する生理的過程とし

での「身振り」という着想が否定されるのである (*ibid.*:124-125)。ミードは語る。

「身振りの第一の機能は、変化する社会的反応と変化する社会的刺激とを相互に適応させることである。この時、刺激と反応は、社会的行為の第一の顕在的位相に見出される」(*ibid.*:125)

ここに及んで「意味」の概念のさらなる展開を見ることになる。ある行為の「意味」は、ただそれに対応する反応であるだけのものではない。「意味」は、一義的に社会過程に結び付けられて理解されるべきものであり、「意味の意識」はその限りでのみ問題にされるものと論じられる。ミードは記している。

「社会的な刺激と反応の相互的適応と、これらが最終的に媒介することになる諸活動との関連にこそ、意味の意識は生起することができる」(*ibid.*:125)

二つの論点を確認されなければならない。一つは「意味」がその社会的状況に客観的にあるということ。もう一つは、その「意味」がこの状況の内部で、関与する諸個体によって「意識」される契機が存在するということ。

「刺激と反応との適応が完全であればあるほど、我々は反応そのものを意識しない」(*ibid.*:126)。しかし、意味は「刺激と反応の関係」に存在するのであり (*ibid.*:127, 129)、「身振りは、それが、意識的意味の有意味性をもつようになる以前に、行われた反応に対する刺激である時点で、すでに有意味である」という (1910a:110)。典型は、刺激—反応の完成された結合形態である習慣的行為である。ここでは意味は意識されない。「個体が別の個体の身振りに単純に適切な反応で答えている限りは、意味の意識は必要ない」(*ibid.*:110)。そこでは、社会的刺激と社会的反応が融合しあっていて、意味は「社会的状況」に「客観的に」与えられているけれども、その限りで、ここに内省的意識が作用する余地はない。「行為の効率的運用」である。「行為の効率的運用に本質的なことは、刺激と反応の結合が習慣的になり、意識の表面下に沈むことである」(1910b:127)。「習慣に完成された行為」は「意味の意識」の基礎ではあるが、それ自体は「意味の意識」を引き起こさせしめるものではないのである (*ibid.*:129)。

では、「意味の意識」の契機はどこにあるのか。

「意味の意識においては、シンボルとシンボライズされるもの、モノと意

味されるものが、別々に示されねばならない」(1910b:128)

回答は「機能主義」的であるといえる。すなわち、「意味の意識」の契機は、諸行為の葛藤にこそ求められねばならないというのである。ミードは論じる。

「人間行為は、第一に自発的注意の本質的な位相である抑止 (inhibition) の増大によって動物の行為と区別される。増大した抑止とは、実現されない活動のしるし (sign) としての、すなわち、行為においてその価値を完全に表出することができずにいる態度を想定させるものとしての、身振りの増大を意味している」(1910b:110)

恒常的葛藤状況が想定されている。状況に関する人々の行為に不可避免的に課される抑止は、「意味の意識」の契機となり、内省的な行為コントロールを要請する。だが、単なる葛藤、たとえば外出したいけれども雨が降りそうだといった葛藤は、刺激と反応の「結合」であるところの「意味」を意識させるものではない。ここでいう葛藤とは、あくまで社会的状況における人々の行為相互の衝突のことである。ミードは、「意味の意識が生じるのは、抑止された行為それ自体の一部である身振りが、別の個体の身振りのイメージを呼び起こす時のみである」(1910a:111) と論じたが、そこには、それぞれの行為遂行のために相互的抑止を余儀無くされるという、相互的葛藤状況が想定されている。「意味」はこの状況の「内に」刺激と反応の結合として、あるいは身振り相互の関係として「客観的」に与えられているのだが、この「結合」が社会的状況に自明のものとして実現されえなくなった時、「身振りがもたらす結果のイメージ」という形で、「意味」が行為者の意識に昇るのである。従って、このようにイメージを媒体に語られる「意味」とは、行為の帰結の意識、すなわち「態度の意識」であった (1910a:111 ; 1910b:125,131 etc.)。「意味の意識」を余儀無くされる時、我々は、「自分自身の反応、あるいは反応傾向を用いて他者の身振りを解釈し」(1910b:130, 132)、このことを通じて「他者の行為をコントロール」しているのである (*ibid.*: 131)。

「他者たちの変化する反応に対する我々の適応は、彼等の刺激に対する我々の反応の分析過程を通じて行われる。このような社会的状況においては、刺激中の要素をそれぞれ様々に定義する諸行為の葛藤が現れるだけでなく、自分自身の態度の意識が、社会的刺激の意味の解釈として現れるのである。

我々が自分の態度を意識するのは、この態度が、他の個体の行為を変化させているからである」(ibid.)

ここで重要なのは、自分の態度が相手の反応の「解釈」になっているというミードの指摘であろう。すなわち、自分の行為、もしくは行為傾向が相手の行為に何らかの影響を呼び起こすということの「意識」である。いわば、自分という「機能的存在」が、社会的状況から抽出されることになるのである。そして、ここから重要な論点が引き出される。「意味の意識」が社会的状況における葛藤を通じての刺激-反応関係の意識である以上、そこには常に「他者」が前提として存在していなければならない。

「社会的環境における他者は、内観が分析する自己の意識に論理的に先行する。心理学が個別的意識の条件として物理的有機体の所与のリアリティを受け入れているのと同じ意味で、他者は、そこにあるもの、所与のものとして受け入れられねばならない」(1910a:111-112)

(以下次稿)

脚注

- (1) マルクシズムの立場からの同様な批判がLichtman(1970)にも見られる。
- (2) 佐藤 (1978) は、人間相互の「始源的」関係を問う中で、ミードの「態度」概念、そして「刺激-反応」の語法が、結局は議論を有機体-環境の二元論に押し遣ってしまっていると論じている。
- (3) ここではとりあげないが、Chasin(1964ab) Blumer(1964) の論争や、Blumer(1981) Morrione & Farberman(1981) を参照されたし。
- (4) 一方、アシュワースはスキナーとミードの相違を、そしてバンデューラとの類似性を論じている (Ashworth 1979:37-44)。また、役割理論の分裂の解決のために「社会的学習理論」を導入しようとするハイスの試みは、同一の見解の表明だと言えるかもしれない (Heiss 1981)。
- (5) ボールドウィンによれば、現代の行動主義心理学とミードに共通して確認することのできるモデルは、古典的行動主義の「S-Rモデル」とは区別される、「S-R-C(Consummation) モデル」であるという。すなわち、行為の「結果」あるいは「予測」という認知的位相の導入である。
- (6) 南 (1976) 矢澤 (1984) 等を参照。
- (7) 草柳 (1985) は「自他」関係における「まなざし」の交錯という文脈において「社会行動主義」を論じている。そこで提示されている「自他関係」として「自我」、「まなざし」の交錯に顕在化する「自我」、といった視角は本稿においても共有されるものである。
- (8) モリスは「社会行動主義 (social behaviorism)」の語はミード自身が採用したものではないと語っているが (Morris 1934:xvi), 『精神・自己・社会』にはこの語が2度 (MS 6, 91) 記されており、「我々の行動主義は社会行動主義である」(MS6) と述べられている。また、マーキィ (Markey 1929) は主観性に関する社会行動主義的研究としてミード、デューイ、ラシュレイらの研究を一括りにしており、あるいは当時ある程度流布していた語なのかもしれない。いずれにせよ、本稿ではネーミングに関しては慣例に従い、とりたてて問題にしない。
- (9) 生理学的心理学を指向していたころの、すなわちドイツ留学期のミードについては、Joas (1980 [1985]; 1981) を参照。
- (10) 「共有」という表現が最も妥当であろう。デューイとミードの相互影響についてはさらに考察を要するものと思われる。
- (11) このように問うのは、「社会行動主義」が単にワトソニズムとの対比において、つまり、単に「内的」経験や社会的経験を射程に入れた「行動主義」であるとして理解されるだけではない、という認識のゆえである。「社会行動主義」は、以下に示すように、ただ古典的行動主義への批判としてのみ意義を持つのではない。
- (12) クックはエンジェルが実際にパラレリズム的記述を行っている点に言及して、ミードの言う「機能主義」はエンジェルの、さらにはジェイムズのそれを指すだろうと指摘している (Cook 1977:311)。
- (13) ボウリング (Boring 1957:645) は、「1920年代は、あたかもアメリカ中が行

- 動主義者であるかのようにだった」と述べているが、してみるとミードが「行動主義」というラベルを採用したのも無理からぬことであったのかもしれない。
- (14) シェフラーはミードの二元論批判が結局は徹底しなかったことを指摘している (Scheffler 1974:167-174)。すなわち、一方で「刺激-反応」の語をもって「機能的」な記述をすと言いつつも、他方で、「イメージ」や「錯覚」などの語が依然として重要な理論的道具立てであり続けているからである。本文中にも述べたように、おそらくミードは二元論を解決したわけではなかったのだろう。彼はただ認識論的・形而上学の問題との格闘を「避けた」のであり、「二元論的」現象を「行為」もしくは「機能」という「一つの言葉」で「説明」することが指向されただけなのである。
 - (15) こうした論点は Lewis & Smith(1980)に詳しく、また、この著作についての様々な論者が批判を寄せている。Johnson & Shifflet(1981) Mills(1982) Rochberk-Halton(1982 ; 1983) Batiuk(1983) Blumer(1983) Campbell(1983) Johnson(1983) Johnson & Picou(1985)などを参照のこと。
 - (16) ルイスのこの文献に関連して、フッサールとの比較においてミードと現象学との対比がなされている。Seeburger & Franks(1978) Lewis(1978)を参照。
 - (17) ブルマーの社会理論と方法論については那須(1983 ; 1984)において、現象学的な見地から詳細な科学方法論的検討がなされている。
 - (18) ジョンソンとシフレット (Johnson & Shifflett 1981:150-151) が語るように、現代の厳密な科学的手続きと、ミードのいう「科学的方法論」とは区別されるべきものであるのかもしれない。しかし、マックフェイルらが行った、ミードに関するいくつか重要な指摘は、後に示すように、科学的営為を社会的な知識再構成過程として捉える視点である。
 - (19) クーリー (Cooley 1926) は主観-客観の二元論的世界観に基づく方法論的考察を行っている。
 - (20) 山田 (1983) は「相互行為」と「コミュニケーション」を対比する視点からマックフェイルとブルマーの論争を要約している。「役割取得」に関する「現象学的」理解と「行動主義的」理解の対比的検討はそれ自体興味深い問題であるが (cf. Stewart 1981), 本稿が重要視するのは、むしろ、マックフェイルらの提示した「社会過程」、あるいは「社会的認識過程」の問題である。
 - (21) ヴント, ダーウィン, ミードをめぐる考察については, Farr(1980 ; 1983)を参照。
 - (22) ミードはマクドゥーガルの『社会心理学入門』に書評をよせているが、ミードが批判するのは知覚と感情の概念化の問題であって、「本能」そのものは問題にされていない (Mead 1908)。
 - (23) ここで「関係」とは単に二個体の身振りの関係を意味するだけではなく、やりとりの結果もたらされるはずの、行為の後の局面と現在の局面との関係を含むものである (cf. MS 75ff)。

文献

- Ames, V. M. 1973a "No separate self."
 —1973b "Mead and European philosophers—Husserl, Sartre, Buber."
 Pp.43-58 & 193-224 in W. R. Corti(ed.), *The Philosophy of George Herbert Mead*. Winterthur, Switzerland : Amriswiler Bücherei.
- Ashworth, P. D. 1979 *Social Interaction and Consciousness*. Chichester : John Wiley & Sons.
- Baldwin, J. D. 1981 "George Herbert Mead and modern behaviorism."
Pacific Sociological Review 24(4):411-440.
 —1985 "Social behaviorism on emotions : Mead and modern behaviorism compared." *Symbolic Interaction* 8(2):263-289.
- Bales, R. F. 1966 "Comment on Herbert Blumer's paper." *American Journal of Sociology* 71(5):545-547.
- Batiuk, M. E. 1982 "Misreading Mead : Then and now." *Contemporary Sociology* 11(2):138-140.
- Blumer, H. 1964 "Comments on Mr.Chasin's article." *Berkeley Journal of Sociology* 9:118-122.
 —1966a "Sociological implication of the thought of George Herbert Mead." *American Journal of Sociology* 71(5):535-544.
 —1966b "Reply." *American Journal of Sociology* 71(5):547-548.
 —1967 "Reply to Woelfel, Stone, and Farberman." *American Journal of Sociology* 72(4):411-412.
 —1969 *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
 —1980 "Mead and Blumer : The convergent methodological perspectives of social behaviorism and symbolic interactionism." *American Sociological Review* 45(3):409-419.
 —1981 "George Herbert Mead." Pp.136-169 in B. Rhea(ed.), *The Future of the Sociological Classics*. London : George Allen & Unwin.
 —1983 "Going astray with a logical scheme." *Symbolic Interaction* 6(1):127-137.
- Boring, E. G. 1957 *A History of Experimental Psychology*. 2nd ed. Englewood Cliffs, N.J.:Prentice-Hall.
- Campbell, J. 1983 "Mead and pragmatism." *Symbolic Interaction* 6(1):155-164.
- Chasin, G. 1964a "George Herbert Mead : Social psychologist of the moral society." *Berkeley Journal of Sociology* 9:95-117.
 —1964b "Reply to Professor Blumer's comments." *Berkeley Journal of Sociology* 9:123-126.
- Cook, G. A. 1972 "The development of G. H. Mead's social psychology." *Transaction of the C. S. Peirce Society* 8:167-186.

- 1974“Review of D. L. Miller, George Herbert Mead : Self, Language, and the World.” *Transaction of the C. S. Peirce Society* 10: 253-260.
- 1977“G. H. Mead’s social behaviorism.” *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 13:307-316.
- Cooley, C. H. 1926“The roots of social knowledge.” *American Journal of Sociology* 32:59-79.
- Denzin, N. K. 1969“Symbolic interactionism and ethnomethodology : A proposed synthesis.” *American Sociological Review* 34:922-934.
- Dewey, J. 1896“The reflex arc concept in psychology.” *Psychological Review* 3(4):357-370.
- Fallding, H. 1982“G. H. Mead’s orthodoxy.” *Social Forces* 60(3):723-737.
- Farr, R. M. 1980 “On reading Darwin and discovering social psychology.” Pp.111-136 in R. G. Gilmour & S. Duck(eds.), *The Development of Social Psychology*. London : Academic Press.
- 1983 “Wilhelm Wundt(1832-1920) and the origins of psychology as an experimental and social science.” *British Journal of Social Psychology* 22(4):289-301.
- 船津 衛 1976『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。
- 1983『自我の社会理論』恒星社厚生閣。
- Gillin, C. T. 1975 “Freedom and the limits of social behaviorism : A comparison of selected themes from the works of G. H. Mead and Martin Buber.” *Sociology* 9:29-49.
- Heiss, J. 1981 “Social roles.” Pp.94-129 in M. Rosenberg & R. H. Turner (eds.), *Social Psychology : Sociological Perspectives*. New York : Basic Books.
- Hewitt, J. P. 1979 *Self and Society : A Symbolic Interactionist Social Psychology*. 2nd ed. Boston : Allyn and Bacon.
- Huber, J. 1973 “Symbolic interaction as a pragmatic perspective : The bias of emergent theory.” *American Sociological Review* 38(2):274-284.
- Joas, H. 1980 [1985] *G. H. Mead : A Contemporary Re-examination of His Thought*. Cambridge : Polity Press.
- 1981 “George Herbert Mead and the ‘division of labor’ : Macro-sociological implication of Mead’s social psychology.” *Symbolic Interaction* 4(2):177-190.
- Johnson, G. D. 1983 “Review of J. D. Lewis & R.L. Smith, *American Sociology and Pragmatism : Mead, Chicago Sociology, and Symbolic Interaction*.” *Theory and Society* 12(2):273-277.
- Johnson, G. D. & J. S. Picou 1985 “The foundations of symbolic interactionism reconsidered.” Pp.54-70 in H. J. Helle & S. N. Eisenstadt

- (eds.), *Micro Sociological Theory*. London : Sage.
- Johnson, G. D. & P. A. Shifflet 1981 "George Herbert who? A critique of the objectivist reading of Mead." *Symbolic Interaction* 4(2):143-155.
- Kolb, W. L. 1944 [1978] "A critical evaluations of Mead's 'I' and 'me' concepts." Pp.191-196 in J. G. Manis & B. N. Meltzer(eds.), *Symbolic Interaction*. 3rd ed. Boston : Allyn & Bacon.
- Kuhn, M. H. 1964 [1978] "Major trends in symbolic interaction theory in the past twenty-five years." Pp.27-41 in J. G. Manis & B. N. Meltzer(eds.), *Symbolic Interaction*.3rd ed. Boston : Allyn & Bacon.
- 草柳千早 1985 『『自我』への社会的行動主義のアプローチ——視られること・視ること——』江原・山岸 編『現象学的社会学——意味へのまなざし』三和書房 176-190頁.
- Lewis, J. D. 1976 "The classic American pragmatists as forerunners to symbolic interactionism." *Sociological Quarterly* 17:347-359.
- 1978 "Reply to Seeburger and Franks." *Sociological Quarterly* 19: 348-350.
- Lewis, J. D. & R. L. Smith 1980 *American Sociology and Pragmatism: Mead, Chicago Sociology, and Symbolic Interaction*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lichtman, R. 1970 "Symbolic interactionism and social reality : Some Marxist queries." *Berkeley Journal of Sociology* 15:75-94.
- McPhail, C. 1979 "Experimental research is convergent with symbolic interaction." *Symbolic Interaction* 2(1):89-94.
- McPhail, C. & C. Rexroat 1979 "Mead vs. Blumer : The divergent methodological perspectives on social behaviorism and symbolic interactionism." *American Sociological Review* 44(3):449-467.
- 1980 "Ex cathedra Blumer or ex libris Mead?" *American Sociological Review* 45(3):420-430.
- Markey, J. F. 1929 "Trends in social psychology." Pp.115-171 in G. A. Lundberg, R. Bain, & N. Anderson(eds.), *Trends in American Sociology*. New York : Harper & Brothers.
- Mead, G. H. 1903 "The definition of the psychical." *Decennial Publications of the University of Chicago*. First series. 3:77-112.
- 1905 "Review of D. Draghiscesco, Du rôle de l'individu dans le déterminisme social, and Le problème du déterminisme, déterminisme biologique et déterminisme social." *Psychological Bulletin* 2:399-405.
- 1908 "Review of W. McDougall, An Introduction to Social Psychology." *Psychological Bulletin* 5:385-391.
- 1909 "Social psychology as counterpart to physiological psychology." Pp.94-104 in SW.
- 1910a "What social objects must psychology presuppose?" Pp.105-

- 113 in SW.
- 1910b “Social consciousness and the consciousness of meaning.” Pp.123-133 in SW.
- 1917 “Scientific method and individual thinker.” Pp. 171-211 in SW.
- 1925 “The genesis of the self and social control.” Pp.267-293 in SW.
- 1927 “1927 lectures in social psychology.” Pp.106-175 in IS.
- 1930 “Cooley’s contribution to American social thought.” *American Journal of Sociology* 35(5):693-706.
- 1934 *Mind, Self, and Society*. Chicago : University of Chicago Press. [MS]
- 1936 *Movements of Thought in the Nineteenth Century*. Chicago : University of Chicago Press. [MT]
- 1938 *The Philosophy of the Act*. Chicago : University of Chicago Press. [PA]
- 1964 *Selected Writings*. Chicago : University of Chicago Press. [SW]
- 1982 *The Individual and the Social Self*. Chicago : University of Chicago Press. [IS]
- Meltzer, B. N., J. W. Petras, & L. T. Reynolds 1975 *Symbolic Interactionism : Genesis, Varieties, and Criticism*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Miller, D. L. 1973 *George Herbert Mead : Self, Language, and the World*. Chicago : University of Chicago Press.
- Mills, P. J. 1982 “Misinterpreting Mead.” *Sociology* 16:116-131.
- 南 博 1976『行動理論史』岩波書店。
- Morrione, T. J. & H. A. Farberman 1981 “Conversation with Herbert Blumer I & II.” *Symbolic Interaction* 4(1&2):113-128, 273-295.
- Morris, C. W. 1934 “Introduction.” Pp.ix-xxxv in MS.
- 那須 壽 1983『『意味の社会学』序説—H. ブルーマーの社会理論を主たる素材として(その1)—』『新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編』24(2): 403-417.
- 1984『『意味の社会学』序説—H.ブルーマーの社会理論を主たる素材として(その2)—』『新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編』25(2):371-382.
- Natanson, M. 1956 [1973] *The Social Dynamics of George H. Mead*. The Hague : Martinus Nijhoff.
- Reck, A. 1964 “Editor’s introduction.” Pp.xiii-lxii in SW.
- Rochberk-Halton, E. 1982 “The real relation between pragmatism and Chicago sociology.” *Contemporary Sociology* 11(2):140-142.
- 1983 “The real nature of pragmatism and Chicago sociology.” *Symbolic Interaction* 6(1):139-153.
- 佐藤俊一 1978「Role-Taking (役割採用) と身体性—Mead, G.H. における

- “role-taking”の方法論的基礎づけ」『年報社会心理学』19:79-102.
- Scheff, T. J. 1967 “Toward a sociological model of consensus.” *American Sociological Review* 32(1):32-46.
- Scheffler, I. 1974 *Four Pragmatists : A Critical Introduction to Peirce, James, Mead, and Dewey*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Seeburger, F.F, & D.D.Franks 1978 “Husserl’s phenomenology and Meadian theory:Comment on Lewis’ ‘The classical American pragmatists as forerunners to symbolic interactionism.’” *Sociological Quarterly* 19:345-347.
- Shaskolsky, L. 1967 [1970] “The development of sociological theory in America : A sociology of knowledge interpretation.” Pp.6-30 in L. T. Reynolds & J. M. Reynolds(eds.), *The Sociology of Sociology : Analysis and Criticism of the Thought, Research, and Ethical Folkways of Sociology and Its Practitioners*. New York ; David Mckay.
- Stewart, R. L. 1981 “What George Herbert Mead should have said : Exploration of a problem of interpretation.” *Symbolic Interaction* 4(2): 157-166.
- Stone, G. P. & H. A. Farberman 1967 “Further comment on the Blumer-Bales dialogue concerning the implication of the thought of George Herbert Mead.” *American Journal of Sociology* 72(4):409-410.
- Stryker, S. 1980 *Symbolic Interactionism : A Social Structural Version*. Menlo Park, Calif. : Benjamin Cummings.
- Watson, J. B. 1930 *Behaviorism*. 安田一郎 訳『行動主義の心理学』河出書房新社 1980.
- Weigert, A. J. 1975 “Substantival self : A primitive term for a sociological psychology.” *Philosophy of the Social Sciences* 5:43-62.
- Woelfel, J. 1967 “Comment on the Blumer-Bales dialogue concerning the interpretatin of Mead’s thought.” *American Journal of Sociology* 72 (4):409.
- Wood, M. & M. L. Wardell 1983 “G. H. Mead’s social behaviorism vs. the astructural bias of symbolic interactionism.” *Symbolic Interaction* 6(1):85-96.
- Woodward, W. R. 1982 “The ‘discovery’ of social behaviorism and social learning theory, 1870-1980.” *American Psychologist* 37(4):396-410.
- 山田重樹 1983『相互作用』と『コミュニケーション』—G. H. ミードとH. ブルマーを中心に—『立命館産業社会論集』34:83-105.
- 安川 一 1984「G. H. Meadにおける行為とパースペクティヴ—self概念の再構成に向けて—」『一橋研究』9(1):119-135.
- 1985a「G. H. ミードの社会理論におけるホワイトヘッド自然哲学—パースペクティヴの客観性をめぐって—」『一橋論叢』93(5):689-708.
- 1985b「G. H. ミード『社会心理学』の性格と課題—社会的実践と社会心理

学——』『社会学評論』36(2):217-231.

—1986「『心的なものの定義』:主観性をめぐって—G.H.ミード『行為の哲学』
に向けて(その1)—』『一橋研究』11(1):83-107.

矢澤修次郎 1984『現代アメリカ社会学史研究』東京大学出版会.

(筆者の住所:〒185 国分寺市東恋ヶ窪3-2-19 ミツ谷荘)